



シリーズ

発達に違いのある子どもたち

『子どもの気持ちを読み取る手助け』 「感覚統合」という視点（中編）

市では、「障がいのある人、ない人にかかわらず、だれもがいきいきと安心して暮らせるまちづくり」を基本理念としてさまざまな施策に取り組んでいます。

今回も、市内で子どもの発達支援に取り組まれているNPO法人「まいすつぷ」から、発達に違いのある子ども達について市民の皆さんに正しく理解いただくために、文章を寄稿していただきました。

育てにくさの理由

「感覚防衛反応（感覚過敏）」の由来

「感覚防衛反応」とは、視覚や聴覚、嗅覚、味覚、触覚、平衡感覚などからの感覚をうまく受け入れられずに、不快でその場から逃げたり、その感覚を発する人や物を攻撃したりする、「感覚情報の交通整理ができない脳」の反応です。逆に、快適に感じた刺激から離れられなくなり、常にその刺激を取り込もうとし、他の刺激から身を守るような反応もあります。

進化の初期の段階の生物（ナマコやインゲンチャクなど）には、目も耳もなく、生きていくために必要な生命維持機能として、餌を捕獲するための「取り込み行動」、敵から身を守るための「防衛・逃避行動」、戦うための「闘争行動」があります。これらの切り替えが即座にできないと、その生物は餓死するか、他の生

物に食べられてしまいます。

「人」の赤ちゃんにも、生命維持機能として反射が備わっており、それらを「原始反射」と言います。赤ちゃんの口の周辺に何か触れるとその方に口を向ける「探索反射」、乳首を口腔内に取り込み吸う「哺乳反射」、この反射のおかげで誰に教わるでもなく、本能でおっぱいを飲むことができます。その他にも手足をつつくと引っ込める「逃避反射」や、手をしっかりと握る「把握反射」などがあり、これらは進化の過程で必要だった生命維持機能です。

高等な哺乳類である「人」は、生後6カ月までの間に多くの「原始反射」が徐々に弱くなり、自分の意思で行動すること



や、物を認識しことばの発達にも関連する「識別系」へと変換させていきます。もし「原始反射」が残ったままだと、離乳食を食べるときに、スプーンから食べ物を取り込むことが困難になり、何でも吸ってしまったり嘔吐することもできなくなります。また、手のひらで物を触っても、触つたものからパツと手を引いて「逃避」してしまい、物を認識することができません。生きるために必要だった「原始反射」、しかしいつまでも残ってしまおうと「取り込み」「闘争」「防衛・逃避」という行動の原因になります。

「感覚防衛反応」を持つ子どもの様子

「感覚防衛反応」はいろいろな形で現れます。「触覚」の防衛反応は、散髪お風呂のシャワー、爪切り、歯磨き、帽子、服や靴下などの拒否（防衛・逃避）があり、そのような子どもは、爪噛みや指しゃぶりなどの自己刺激行動（取り込み）や、他の子どもを引っ掻いたり、噛みつきたり（闘争）することもあります。「聴覚」の防衛反応は、掃除機の音、遮断機の音、打ち上げ花火や運動会のピストル、電車のアナウンス、反響音やざわめきのある建物の中などを怖がり、逃げたり耳を塞いだりします。



「視覚」の防衛反応は、多すぎる掲示物、人混み、日光の光、蛍光灯の光からの逃避、白すぎる用紙や色とりどりのテキストを不快に感じる子どもいます。「平衡感覚」の防衛反応は、ブランコやシーソーなどの揺れる遊び、高いところ、エレベーターなどを怖がり、車酔いがひどいという子どももいます。いずれも感覚刺激に対し、子どもの脳が交通整理をすることができず、過剰に反応してしまっている状態です。そのほか「嗅覚」や「味覚」の防衛反応もあります。

「子どもの気持ちを知る絵本③発達凸凹なボクの世界」の中には、主人公タク君が感じる感覚過敏の世界が詳しく描かれています。我が子が、または自分自身が「感覚防衛反応（感覚過敏）」を持っていると感じられた方には、ぜひお薦めしたい絵本です。今回はこのような「感覚防衛反応」にどのように対処したら良いのかお話ししたいと思います。

参考文献

発達凸凹なボクの世界―感覚過敏を探検する―ブルスアルハ ゆまに書房

